慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「市民」であることのむずかしさ： 「弱い敵」との共存を拒否するアジェグ・バリの現場から
Sub Title	
Author	吉原, 直樹(Yoshihara, Naoki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.37- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：都市の公共性
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「市民」であることのむずかしさ

―「弱い敵」との共存を拒否するアジェグ・バリの現場から―

吉原　直樹

１．はじめに

新自由主義が世界を席捲している。個人の自己責任が声高に叫ばれ、競争が至上のものとされている。オルテガによると、こうした＜いま＞はまさに「野蛮な時代」ということになる。

「手続き、規範、礼節、非直接的方法、正義、理性！これらはなんのために発明され、なんのためにこれほどめんどうなものが創造されたのだろうか。それらは結局、＜文明＞というただ一語につきるのであり、文明は＜キビス＞つまり市民という概念のなかに、もともとの意味を明らかに示している。これらすべてによって、都市、共同体、共同生活を可能にしようとするのである。‥‥これらすべては、ひとりひとりが他人を考慮に入れるという、根本的、前進的な願いを前提にしているのである。文明はなによりもまず、共同生活への意志である。他人を考慮に入れなければ入れないほど、非文明的で野蛮である。野蛮とは、分解への傾向である。だからこそ、あらゆる野蛮な時代は、人間が分散する時代であり、たがいに分離し敵意をもつ小集団がはびこる時代である。」（オルテガ　2002：89-90）

新自由主義はまぎれもなく自由主義を水脈としている。しかしそれは自由主義からあまりにも乖離してしまっている。ちなみに、新自由主義と似て非なる自由民主主義の本義は、オルテガによるとこうである。

「政治的に共存への意志がもっとも高く表現される形式は、自由民主主義である。それは、隣人を考慮に入れる決意を極限まで推し進めたものであり、＜間接行動＞の原型である。自由主義とは、公権が万能であるにもかかわらず、公権自体を制限する政治的権利の原則であり、また、公権と同様に、つまり、最強者、多数者と同様には考えず、また感じもしない人々も生きていくことができるように、公権の支配する国家のなかに、たとえ犠牲を払ってでも、余地を残しておくことに努める政治的権利の原則である。

自由主義は‥‥最高に寛大な制度である。なぜならば、それは多数派が少数派に認める権利だからであり、だからこそ、地球上にこだましたもっとも高貴な叫びである。それは、敵と、それどころか、弱い敵と共存する決意を宣言する。‥‥敵とともに生きる！」（同上：90）

吉原直樹「「市民」であることのむずかしさ―「弱い敵」との共存を拒否するアジェグ・バリの現場から」
三田社会学第 16 号（2011 年 7 月）37 - 47 頁

詳述はさておき、「文化的な共存を拒否し、野蛮な共存に退化」（同上：87）している＜いま＞こそ、「弱い敵」との共存が問い込まれているといえる。それは、「生の複数性」と「閉ざされていないこと」（齋藤 2000，2008）に底礎する「公共性」にとって第一級の問題構制（プロブレマティーク）としてある。以下、本稿では、アジェグ・バリ（Ajeg Bali：バリ復興運動）に誘われた、州都デンパサールのガジャマダ通りの街路整備を反証素材として取り上げることによって、上述の問題構制の含意をさぐることにする[1)]。

２．ガジャマダ通りの街路整備―「美しいまち」への志向―

（１）対象地の概況

本稿の事例対象地であるガジャマダ通りは、州都デンパサールのほぼ中央に位置するププタン広場を囲む CBD（中心業務地区）の一角にあり、古くから、インド系ムスリムの敷布・織物の小売商が集住し市街地を形成してきた。通りをちょうど東西に分かつ中間のところにバリ州最大のバドゥン市場が立地し、また街路の一部に植民地時代からの歴史的町並みを残していることもあって、消費都市／文化都市デンパサールのダウンタウンとして、長い間、デンパサール市民のみならずバリ州民に親しまれてきた。バリっ子にとってガジャマダ通りは自慢の場所であり、そこに行くと何でも手に入れることができた。ところがこの間、グローバル・ツーリズムが進展し、バリ自体がグローバル・ブランド化するなかで、州都デンパサールにヒト、モノ、コトが集中するようになった[2)]。そしてそれとともに、ガジャマダ通りも市民／州民の買物の場、憩いの場というよりも、むしろ海外からのツーリストのまなざしが向けられる場―アーリにならっていうと、「場所の消費」（アーリ 2003）がなされる場―になった。それも結局は、グローバル・ツーリズムの進展にともなって、ひたすら過集積化し外延化することになったデンパサール中心市街地の動きにガジャマダ通りが呑み込まれたことによるものであった。

しかしそうした中心市街地の過集積化→外延化にたいして、長い間、公的介入は一切なされず、これといった都市再開発も行われなかった。したがって、強制、権力、義務としての「公共性」の不在がかえって中心市街地を特徴づけるものとなったのである。そうしたなかで、特にガジャマダ通りでは、ヒトとモノが許容量を越えて行き来するようになり、慢性的な交通渋滞、犯罪の多発等により、ダウンタウンとしてのたたずまいを保持してきたマチがこわれ、機能麻痺寸前に陥ることになった。そしてプレマン（やくざ）のような人びとが徘徊するようになった。こうした事態は、ガジャマダ通りをグローバル・ブランド化の目玉にと考えていたデンパサール市当局においても座視できないものであった。ともあれ、こうしてデンパサール市が主導する、ガジャマダ通りを「美しいまち」にする街路整備が始まった。実は、この街路整備が後述するアジェグ・バリ（バリ復興運動）とむすびついて、「閉じて守る」まちづくりの性格を帯びることになったのである。

（2）街路整備の展開

街路整備は、2008 年 6 月、デンパサール市開発計画局が街路の再開発の一環として植樹計画を発表したことからはじまった。この計画は当時の市長（現、バリ州副知事）の文化都市構想（Kota Budaya：デンパサール市を「昔の自然の多いバリ」に戻すという構想）の一環として発表されたものである。なお、発表に前後して、ガジャマダ大学とデンパサール市都市計画局の合同チームによって、ガジャマダ通りの店舗所有者 111 人にたいして計画についての意向調査（アンケート）が実施されたが、街路の植樹計画に「イエス」と答えた者は全体の 8.59 パーセントにとどまった。ただ、「駐車場の確保」という条件付きで賛成する者は過半数を越えた。調査結果は、ビジネス・センターとしての機能を保持するとともに歴史的街並みを維持するために、「駐車場の確保」、「渋滞を緩和するための交通規制」、「歩行者専用道路の整備」、「景観（看板、建物等）の保全・規制」、「カキリマ（屋台）、ホームレスの取り締まり」等を、ローカル・イニシアティヴ／コミュニティ主導で遂行すべきであるという主旨の提言としてまとめられた（Dwijendra and Yudantini 2007：70）。

ところで、街路整備はこの計画に沿っておしすすめられたが、公式（フォーマル）にはガジャマダ通りを管轄する二つのバンジャール（banjar：集落）、すなわち通りの北側を占めるバンジャール・ワンガヤ・クロドと南側を占めるバンジャール・ティティの承認の下に、デンパサール市都市計画局によって推進されるという「かたち」をとった。つまり街路整備が、コミュニティの「承認」を取り付けることによってローカル・イニシアティヴ型都市再開発として展開するというシナリオの下におこなわれたのである。とはいえ、行政によるバンジャール／コミュニティの「承認」の取り付けかたは、バンジャール・ワンガヤ・クロドとバンジャール・ティティとでは大きく異なっていた*。

＊バリの地方制度は、ディナス（行政）とアダット（慣習）の二元構成である。すなわち、デサ（村落）は、一連の儀礼的で象徴的なマターを取り扱うデサ・アダット（慣習村）と世務と司るデサ・ディナス（行政村）からなる。そしてデサに下属するバンジャールも、バンジャール・アダットとバンジャール・ディナスからなる。こうしたデサ―アダットにみられる分化の起源は、オランダがバリ島全体を植民地化した時点にさかのぼることができるといわれている。ちなみに、バンジャール・ワンガヤ・クロドもバンジャール・ティティもバンジャール・アダットである（吉原 2008）。

バンジャール・ワンガヤ・クロドは、植樹計画が発表された段階で反対した。そこでデンパサール市長は民間企業にバンジャールへの交渉を依頼し、それを受けて民間企業はバンジャール長およびデサ長と会談した。いずれも反対の意向を表明したが、この民間企業は市長にその意向を伝えず、逆にバンジャールおよびデサにたいして市（市長）の意向を「もはや変わることはない」として強要した。またデンパサール市当局は、バンジャールを飛び越えて直接店舗

所有者に説明会に出るよう要請した。これにたいして店舗所有者は、出席すると計画を認めたことになるということで説明会には出なかった。この拒否／無視は、結果的に、行政が地元は「承認」していると判断する口実を与えてしまった。他方、バンジャール・ティティでは、前市長の意向に忠実にしたがうバンジャール長のイニシアティヴで植樹計画の全面的な受け入れをおこなった。前市長がおしすすめる文化都市構想→植樹計画の進展によってガジャマダ通りの再生／活性化が可能になるというのが受け入れの主たる理由であった。前市長とバンジャール長の間で培われてきた政治的なコネクションが何らかの形で作用したと考えられる[3)]。

ともあれ、地元コミュニティの対応は、反対（無視）と賛成に大きく分岐することになった。行政としては、こうした状況にたいして、一方でリーダーの意向を巧みに回避し、他方で地域権力構造に分け入ることによって、バンジャール／コミュニティの「承認」を取り付けることに成功したのである。コミュニティの「承認」は、行政が植樹はコミュニティ主導のものである、つまり、ローカル・イニシアティヴ型都市再開発であるということを声高に叫ぶためにもなくてはならないものであった。もちろん、この場合に、バンジャール・アダットのディナス化[4)] を見据えた、行政によるバンジャールの上からの「掌握」がきわめて巧妙になされたことを忘れてはならない。

（3）「美しいまち」の誕生

さて、植樹は 2008 年 12 月から 2009 年 3 月にかけておこなわれた。舗道に煉瓦も敷かれた。同時に、老朽化し、街の景観を損ねていると市当局が判断した建物の撤去もおこなわれた。それらはニュー・ガジャマダ地区（ガジャマダ通りの西側の地区）を対象にかなり短期間において実施された。しかし条件付き賛成派がかかげた点、すなわち多くの店舗所有者が要望した駐車場の確保については据え置かれた。植樹はたしかにくすけたガジャマダ通りに「緑」をもたらしたが、店舗所有者にとってはその「美しいまち」は自分たちの望むものとはまるで違っていた。かれらは往時の「にぎわいのあるマチ」の再来を期待していたのである。

街路樹のある「美しいまち」の出現とひきかえに、にぎわいが失なわれてしまった。買物客は植樹前に比べて半減してしまった。祖父の代から店舗を構えている T さんは、「バリ人は車とかバイクを使って買物をする。しかし駐車場がなくなり、また植樹によって通りから店の様子が見られなくなったために買い物客が大幅に減った。」と嘆いている。通りの一部は、シャッター通りと化している。しかもここにきて、上位計画である文化都市構想自体がほとんど進捗していないことが明らかになり、ガジャマダ通りに熱いまなざしを向けてきた市民／州民の間から、街路整備が中途半端に終わっているという声が聞かれるようになっている。植樹を強行したデンパサール市都市計画当局自体も、地元のデンパサール市民、そして周辺からマイカーでやってくる人びとがガジャマダ通りよりは大規模な駐車場を備えたモールとかショッピング・センターに向かう傾向[5)] にあることを認めている。ともあれ、コミュニティ主導、ローカル・イニシアティヴといいながら地元民の視線に立たない街路整備＝植樹の隘路がにわかに浮

き彫りになっているのである。

３. アジェグ・バリと共振する街路整備

（１）街路整備におけるガバナンスの「かたち」

こうしてみると、指摘してきたような街路整備は、少なくともこれまでのところ、ガジャマダ通りの活性化／再生につながっているようにはみえない。むしろインナーエリアに特有の衰退を早めているような印象さえ受ける。さてここであらためて注目したいのは、みてきたようなガジャマダ通りの街路整備が、フォーマルなレベルである種のローカル・ガバナンス[6]に基づいておこなわれてきたことである。すなわち、（１）地元商店街と行政と大学のコラボレーション（協働）を基軸にして、（２）バンジャールというコミュニティがイニシアティヴを握る、「内から」のまちづくりといった「かたち」をとってすすめられてきたことである。

もっとも、実態としては、コラボレーションとか「内から」のまちづくりは空文化しており、ガバナンスに基づく街路整備は作りごと（フィクション）に近いものであった。むしろコミュニティを巧みに動員した行政主導のまちづくり＝街路整備であったといった方が適切であろう。加えて、街路整備が実質的に「緑」というイッシューをめぐってなされたために、ガバナンスを構成するはずのステイクホルダー間で容易に調整が取れず、ゆるやかな合意すら得られなかったこと、つまり、ガバナンスという「作用原理」がほとんど機能しなかったことは否定できない。いずれにせよ、ガジャマダ通りの街路整備はガバナンスというよりはガバメントとしての性格を色濃くとどめるものであったといえよう。またそうした点で、地元メディア（バリ・ポスト）が「コミュニティ主導の街路整備」と称揚したのもきわめて行政寄りの立場を示すものであったといえる。

（２）アジェグ・バリと街路整備

ところで、上述のガバメントとしての性格は、（みてきたような街路整備が）「古きよきバリを守れ！」と唱和するアジェグ･バリの運動と共振することによっていっそう際立たせている。そこでさしあたり、アジェグ・バリについて素描してみることにする。

アジェグ・バリは、ひとことで言うと、1990 年代、とりわけ後半になって「バリ・ポスト」グループを担い手としてバリ中に拡がった、バリの伝統の保持を求める運動である。それは、グローバル・ツーリズムの進展とともに生じたムスリムのキプム（KIPEM）という出稼ぎ労働者の強制的導入、そしてそれに伴う新たなエスノスケープの出現[7]―たとえば、モスクの林立、カキリマの乱立、ヒジャブ（hijab）をかぶった女性の叢生、書店でのコーラン関連書籍の氾濫、等々―を背後要因として立ちあらわれたものである。ちなみに、キプムについていうと、それはグローバル･ツーリズムの進展とともに創出された雇用職種（ホテルとかレストランの従業員）に吸引されていった地元バリ人に代わって農業労働とか建設労働に従事するためにジャワから来た出稼ぎ労働者である。

ところが 2002 年 10 月 12 日に起きた爆弾テロ事件を契機に、アジェグ・バリがあらたな展開をみせるようになった。それまでの伝統の鼓吹といった文化的表現に重きを置いた復興運動から「離脱」して、明確に社会的で政治的なスローガンを掲げるようになり、2000 年代後半には、グローバル・ツーリズムがもたらした影の部分を「悪」とみなして、それを排除することに運動の主眼が置かれるようになった。そこで「悪」とみなされたのは環境破壊とか格差の拡大であるが、それと同列にジャワからの一時滞在者であるキプムが位置づけられた。こうしてアジェグ・バリを唱和するもののなかから、あるいはそれと符節を合わせるようにして、カキリマの排除とか、コミュニティが率先しておこなうキプムにたいするシダック（sidak）という抜き打ち検査を支持する世論が広範囲に形成されるようになった。こうしたアジェク・バリの趨勢には、あきらかに「バリ社会へのイスラムのインパクトの増大」にたいする既存社会のリアクションという動きが読み取れるが、同時にそこを通底するゼロ・トレランスからセキュリティの「過剰化」に至る一連の動きは、新自由主義に誘われたグローバル化の主潮[8)]と響き合っている。

ここであらためて指摘したいのは、みてきたようなガジャマダ通りの街路整備がこうしたアジェク・バリに呼応して、一方で「昔の、自然の多いバリ」＝「古き、よきバリ」をもとめ、他方でキプムの「侵入」から自分たちを守り、「異なるもの」にたいする非寛容（ゼロ・トレランス）を貫くまちづくりとして展開されたことである。むろんそれは、みてきたように店舗所有者とかバンジャール住民の意向に違背した形で展開されたが、またかれらにたいして「意図せざる結果」を招いたが、路上からカキリマを排除する（ときとしてプレマンを使いながら）ことに積極的に関与し、シダックに主体的にかかわったという点でいうと、かれらが行政とともに「美しいまち」の共奏者としてアジェグ・バリを担ったことは否定できない。

（3）自閉するまちづくり

すでに多くの先行研究によって指摘されていることであるが、これまでバリ・ヒンズー社会の基層をなしてきたのは、シンクレティズムに根ざした複層的な社会構成原理であった。そしてコミュニティ・レベルでいうと、ギアツが「多元的集団構成」と呼んだもの（Geertz 1963：85）がこの社会構成原理を体現していた。そのこともあって、バリ社会は「ヒンズーの島」と言われてきたにもかかわらず、「外に開かれた性格」を有してきた。しかしいまやバリ社会では、アジェグ・バリの波に席捲されるなかで、上述の複層性と相容れない「単一文化」への希求が強まっている。それはポスト「パンチャシラデモクラシー」（公式には「公正で文化的な人道主義」をめざす「指導される民主主義」）の亜流でもなければ、多文化主義の「歪曲」とか「反転」態でもない。まさに純正なバリ・ヒンズーの自己呈示そのものをめざす運動としてある[9)]。それ自体はグローバル化の対向をなすローカル化の性格を色濃く帯びているが、（とりわけ 10.12 以降）新自由主義的なグローバル化の共鳴板として作用するようになっている点で汎世界的な局面[10)]を強く併せもつものであるといえる。

もはや指摘するまでもないが、アジェグ・バリと共振するガジャマダ通りの街路整備の特徴は、基本的に「自閉するまちづくり」という点にある。そしてそれがグローバル・ツーリズムの進展によって育まれながら、それを阻止するものへと反転し、再びグローバル・ツーリズムの派生態へと自己撞着するところにこの「自閉するまちづくり」の＜現在性＞というものを観て取ることができる。「美しいまち」をめざす「自閉するまちづくり」が単に「昔の、自然の多いバリ」＝「古き、よきバリ」に回帰するものでないことを、ここで確認しておく必要がある。

４. むすびにかえて

本稿の事例をなすガジャマダ通りの街路整備は、あきらかに「自閉するまちづくり」の範型をなしており、多様な利害（ステイク）のせめぎあいを保障する、外に開かれた性格のものからは乖離している。だから、あらゆる人びとに「席」＝「場所」が設けられている「公共的空間」としての内実を問うなら、それから最も遠いところにあるといえる。あえて繰り返さないが、本稿ではそのことを「indigenous な都市再開発」（バリ・ポスト紙）がガバメントの機制に回収されていくガバナンスの「かたち」の裡にみた。最後に、いまいちど「はじめに」立ち帰って、このことの含意するものを確認しておこう。

ガジャマダ通りの街路整備で立ちあらわれる「弱い敵」はさしあたりキプムであり、かれらの生活機会を底辺レベルで保障するジャワ人である。こうした「弱い敵」との共存を拒否するところに、ガジャマダ通りの街路整備の最大の特徴があるといっていい。さて、共存を拒否された「弱い敵」＝キプムはアーレントのいう「見棄てられた境遇」に追いやられる。そして「余計者」となる。ちなみに、アーレントによると、「見棄てられていることは‥‥根を断たれた、余計者の境遇と密接に関連している。根を断たれたというのは、他者によって認められ、保護された場所を世界にもっていないということである。余計者ということは、世界にまったく属していないことを意味する」（アーレント 1974：320）。こうした「見棄てられ」た「余計者」が街路整備をめぐって数多く輩出されている。かれらは「市民」であることを否定されている。ちょうど、「差異論的人種主義」が吹き荒れるヨーロッパにおいて社会の最底辺／周辺において累積されてきた二級市民と相同する位置にある（斉藤・岩永 1996）。

だが考えてみれば、市民権（ここでは居住権の意味で用いる）すら認めない、こうした「弱い敵」の拒否＝切り捨てはいくつもの綻びを抱えている。まず店舗所有者がもとめる「にぎわいのあるマチ」は、既述した「異なるもの」にたいする非寛容（ゼロ・トレランス）を貫くまちづくりの延長線上では実現されない。たしかに、デンパサール市内の随所に「美しいまち」の典型であるゲーテッド・コミュニティが立ちあらわれているが、ガジャマダ通りについていうと、その再生／活性化には「異なるもの」がせめぎあう雑多なにぎわいが不可欠であり、ガジャマダ通りにやってくる海外からのツーリストにとってもそのにぎわい[11)]を抜きにして「場所を消費する」ことはない。いうまでもなく、こうしたにぎわいをもっとも底辺のところでにない支えているのはキプムであり、かれらを取り囲む「異なるもの」たちである。カキリマの

追放に加担しながら、そのことが自らの足元を堀り崩していることに店舗所有者の少なからず部分が気づきはじめている。

他方、バンジャールの住民はといえば、多くの人たちは当初から街路整備に反対であったにもかかわらず、いわゆるトップヘヴィの組織構成の下で正当に意思を表明する回路を持たず、もっぱら街路整備に向けてのコミュニティの「承認」のための動員とアジェク・バリを下支えする要員の調達に与してきた。しかしここにきて、組織をあげてのシダックへの加担が、自分たちの雇用の基盤を根底のところで危うくしかねない要素をはらんでいることを遅まきながら認識するようになっている。ちなみに、二つのバンジャールの住民の大半は、公務員、ホテルやレストランの従業員、サービス業従事者であり、底辺職種に就いているキプムの支えなしにかれらの日常生活が成り立たないことにうすうす気づきはじめている。

いずれにせよ、「弱い敵」との共存の拒否は、グローバル・ツーリズムが新自由主義と深く交差する場面で立ちあらわれたものであるが、それがいまやグローバル・ツーリズムそのものを否定しかねない局面に至っていることを示すものであるといえる。だからこそ、この局面に立って、「弱い敵」を排除するのではなく、むしろ包摂するような街路整備のありかたを模索する必要があるし、そのための「市民」であることの要件を問い込まなければならない。こう問いをたてると、あらためて「市民」であることのむずかしさに思いをはせることになるが、要は「弱い敵」が居住権を行使することができるような「公共的空間」をストリートコミュニティにどう埋め込むか、そしてそのために店舗所有者、バンジャールの住民が外に開かれたメンバーシップをどのようにして確立するかということが問われることになろう。

この場合にあらためて想起されるのは、バンジャールが「多元的集団構成」の裡に担保してきた「外に開かれた性格」である。グローバル・ツーリズムはこうしたものを徹底的に破砕してきたが、社会の基層においてなおも生き続けているようにみえる。そうだとすると、上述したメンバーシップの確立にこの「外に開かれた性格」がどのように引き継がれているのか、あるいはそうでないのかを考えることはきわめて重要な問題圏を構成することになる。複層的な社会構成が「市民」であることの要件の構成におよぼす影響にははかりしれないものがあると思われる。「市民」であることのむずかしさにたじろぐのではなくて、この影響の検討を介して「市民」であることの多様な可能性に思いをいたすなら、どれほど心が沸き立つことであろうか。本稿で取り上げた事例がそのような機会を与えているとはとても思えないが、そのための一つのイニシエーションの契機をなしているとはいえるかもしれない。いずれにせよ、「弱い敵」との共存についての考察はようやくはじまったばかりである。

【註】

1) 以下の本稿の事例に関する叙述は、吉原（近刊）を要約的に再構成したものである。紙幅の関係もあって、傍証となる図表等の資料の掲載は一切割愛した。そのため、以下の展開にややわかりにくい面があるかもしれない。詳細は上述の拙稿を参照されたい。

2) バリにおけるグローバル・ツーリズムは、1990 年代に入ってすさまじい勢いで進んでいる。そうしたなかで本稿との関連で特に注目されるのは、バリ生まれの若者がホテルもしくはホテル関連産業に吸引され、バリの主産業である農業の後継者不足が深刻化している。実はこうした状況のなかで、ジャワ（とりわけ東ジャワ）からの農業および建設業に従事する出稼ぎ労働者が増えていることである。こうしたヒトの移動は、グローバル・ツーリズムの進展とともに必然的に生じたものであるが、後述するように、アジェグ・バリをひきおこす要因にもなっている。

3) バンジャール長は、地元のウダヤナ大学(国立)文学部出身で学生時代から前市長の懐刀として働いてきた。そもそもバンジャール長に就任したのも前市長の要請によるものであった。前市長はその後、副知事に転出したが、バンジャール長を担い手とする地域権力構造に深く根を下ろしている。バンジャール長は、計画が発表されるやいち早く賛成の意向を示し、バンジャールをその方向でまとめあげた。

4) 先にも指摘したように、バンジャールはアダット（慣習）とディナス（行政）の二元的構成からなる。しかし近年、アダットの一部が外部化され、またツーリズムのなかに組み込まれていくなかで、ディナスがアダットに介入してくるといった事態が見られるようになっている。またこうした動きとともに、ディナスとアダットの両方にまたがる役職構成が一般化しつつある。しかもその場合、世話役型ではなく、経営者型のリーダー層の台頭が目立っている。注 3)で触れたバンジャール長もそうしたリーダーの一人である。

5) この傾向は著しい。ミドルクラスの台頭とともに、マイカーを駆使した消費行動に照準した大規模なモールやショッピング・センターが CBD から離れたインナーエリアおよび郊外に立地するようになっている。しかもこうした立地に世界的に展開している流通関連企業が参入し、スクラップ・アンド・ビルドがすすんでいる。こうしたなかで CBD に隣り合わせて立地する既存商店街が衰退を強いられている。

6) ここではローカル・ガバナンスを「地方政府、企業、NGO、NPO などがさまざまな戦略をめぐって織りなす多様な組み合せの総体―対立、妥協、連携からなる重層的な制度編成」（吉原　2002:96）の意味で用いる。重要なことは、ガバナンスは制度そのものというよりは制度の思想であるという点である。

7) ウダヤナ大学の S によると、これらはかつてバリの風景にはなかったものであり、それだけバリがムスリム化しつつあることを示している、という。そうしたなかで、州条例によってカキリマを規制する動きが出ていることは注目される。なぜなら、それはジャワ人、特にキプムの食習慣を根底から否定するようなものとしてあるからだ。同時に、ジャワ出身のホテルオーナーたちの間では、カキリマを観光資源として取り込もうという動きもみられる。詳述はさておき、グローバル・ツーリズムのなかで徐々に大きな部分を占めるようになっているドメスティックなツーリストの移動を見据えてのことである、と想到される。

8) 今日、都市構造再編（アーバン・リストラクチャリング）の基調音を奏でているものが「安全で清潔な空間」の創設である。それはいってみれば、都市空間全体をゲーテッド・コミュニティ化しようとするものであり、自己責任を強調する新自由主義的な都市経営の下では高度なセキュリティ空間が至上のものとされる。グローバル・ブランド化によってアジア・メガシティへの格上げをねらっているデンパ

サール市も例外ではなく、とりわけ 10.12 を境にしてセキュリティの過剰化へとひた走りしている。

9) 「バリ・ポスト」グループによって口火が切られたアジェグ・バリは、当初は小学校におけるバリ語の正規科目化といった文化教育運動としての性格をもつものであったが、いまや本稿の事例にみられるように都市再編（urban restructuring）からはじまってコミュニティ・ポリシングを下支えする活動にまで広がっている。脱領域化にたいするリアクションとして、ナショナリズムではなくて、純正なバリ・ヒンズーの自己呈示として立ちあらわれているところに、アジェグ・バリの歴史文化構造に深く根ざした特異な性格を読み取ることができる。

10) この局面で強く想起されるのは、斉藤日出治らが注目する、ヨーロッパで吹き荒れている「差異論的人種主義」である（後述）。それは文化の多様性と平等性を尊重し、それらの差異の還元不可能性を強調する構造主義的人類学の立場を剽窃しひっくり返した上で、諸文化の「相違の権利」を排他的に手に入れようとするものである（斉藤・岩永 1996）。こうした動きは、その表出のしかたはさまざまであるとしても、その後、世界のあちこちで噴出している。

11) この場合のにぎわいは、見る者にとってのにぎわいであるから、すでにツーリズム戦略に組み込まれている。しかし外部のまなざしで「場所を消費する」者にとっても、「異なるもの」のせめぎあう地平から立ちあがってくるにぎわいでなければ興趣あふれるものにはならない。いわば遷移地帯（zone in transition）がかなでるにぎわい―それが成長局面のものであれ、衰退局面のものであれ―は、古今東西、都市の魅力の源泉をなしてきたものである。

【文献】

Arendt, Hannah, 1951, *The Origins of Totalitarianism*, Meridian Books.（＝1974，大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源』3，みすず書房 ）

Dwijendra,N.K.A. dan Yudantini,NI Made, 2007‘Studi penggalian aspirasi pemilik toko dalam rangka penataan koridor JL.Gajah Mada kota Denpasar,’*Jurnal Permukiman Natah*,Vol.5, No.2, 62-71.

Geertz,Cliford, 1963, *Peddlers and Princes: Social Change and Economic Modernizations in Two Indonesian Towns*, University of Chicago Press.

José Ortega y Gasset, 1962, *La rebelión de las masas, Revista de Occidente*, Obras Completas,Vol.4.（＝2002，寺田和夫訳『大衆の反逆』中央公論新社）

斎藤日出治・岩永真治，1996,『都市の美学』平凡社

齋藤純一，2000,『公共性』岩波書店

齋藤純一，2008,『政治と複数性』岩波書店

Urry,John, 1995, *Consuming Places*, Routledge.（＝2003，吉原直樹・大澤善信監訳『場所を消費する』法政大学出版局）

吉原直樹，2002,『都市とモダニティの理論』東京大学出版会

吉原直樹，2008,「デサとバンジャール」吉原直樹編著『グローバル・ツーリズムの進展と地域コミュニ

ティの変容』御茶の水書房，19-43 頁
吉原直樹，近刊，「アジェグ・バリと自閉するまちづくり―デンパサール中心市街地の再開発をめぐって―」西山八重子編『分断化社会と都市ガバナンス』日本経済評論社

（よしはら　なおき　大妻女子大学）